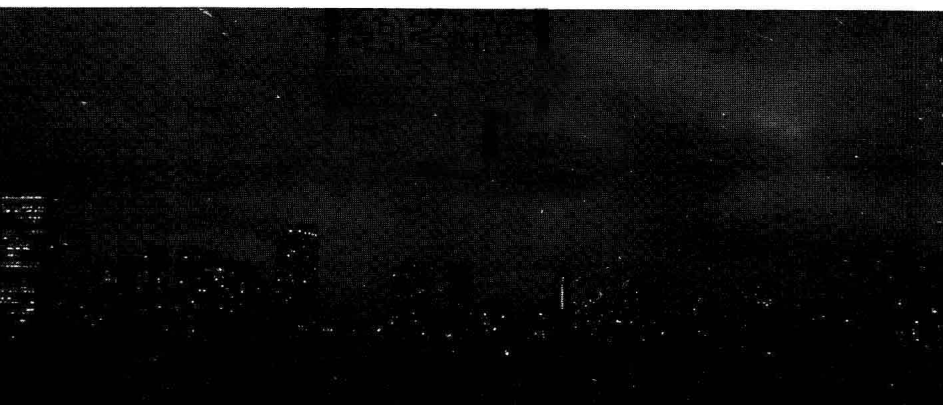


真
夜
中
の
匂
い
山
田
太
一

真
夜
中
の
匂
い
山
田
太
一



真夜中の匂い

一九八四年七月三〇日 第一刷発行

著 者 山田太一

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一・二三・四
郵便番号 一一二

電話 (二〇三) 四五一一
振替 東京六六四二二七

印刷所 暁印刷

製本所 ナショナル製本

写 真 篠山紀信

装 幀 高麗隆彦

©1984 T. YAMADA Printed in Japan
ISBN4-479-54023-7

乱丁本・落丁本はお取替します

真
夜
中
の
匂
い

真夜中の匂い 目次

1 裸体について

5

2 変身

32

3 初体験

58

4 六月の別れ唄

84

5 知らなかった感情

109

6 男の内部

134

7 揺れている日々
161

8 トランプ占い
191

9 誰かといたくて
219

10 チャンス
247

11 夢遊戯
272

12 再会
297

13 一人を残して
322

裸体について

●商事会社ビル・一階ロビー（昼）

正面のドアの忙しい出入り。ガードマン。受付の数人の女性の応待などのスケッチ。

エレヴェーターの方から秋本洋子、馴れた足取りでロビーを横切って、隅にとり残されたように腰をかけている則子、雅美、季子に近づく。三人、自分たちに向って来る人を見て、もうバラバラと立ち上る。緊張している。

洋子「蒼野さんでいらっしやいますか？」

則子「はい」

雅美「すいません」

則子「あ、友だちなんです。お話聞くのに一人じゃ勿体ないと思って」

雅美「コネ、なかなかないもんですから」

季子「すいません」

洋子「いえ、いいんです。いいんですけど、課長お目にかかれないますよ」

則子「そうですか」

雅美「どうして、でしょうか」

洋子「社のとりきめでね、就職に関する面会は一切出来ないことになってるんです」

●ビジネスビル街

雅美「三人で歩いていて」嘘よ。絶対嘘。こないだ有田君の友だち、中央の法学部の子、あそこの部長と逢ったっていったもん（とカッカして一氣にいう）」

則子「（同じく熱くなっている）そうよ。明らかに四年制の女子大を差別してるのよ。男性には逢ってるに決ってるじゃない（季子が立ち止ったのに気づく）」

雅美「ぬけぬけ社のとりきめだなんて（よくいう、といいかけ則子に気づく）」

則子「（振りかえっていて、立ち止っている季子に）どうした？」

雅美「（季子に）なに？」

季子「（立ち止っていて顔を上げ）なんでもない（と微笑して来る）」

則子「（その季子を見て）なんでもなくない（とやりすぎしながらいう）」

雅美「（やはりやりすごしながら）どうした？」

●女子大構内・メインロード

レギュラーのタイトルバック。学生たちの往き来。現実音。

そして、音楽と共に――。

●夜の街の灯とスチール写真

メイン・タイトル『真夜中の匂い』

歓楽を感じさせる街の灯と、ヘルムート・ニュートンのスチールとの合成。

●女子大・キャンパス

女子大生活のスケッチ。授業風景を含む。

●街の灯とスチール

キャンパスと交互に編集して、タイトルバック、終る。

*

●女子大構内（昼）

雅美が人を縫うように急ぎ足で歩く。

髪の毛をちょっと気にする。

●構内の一画

則子「（ベンチから立ち上り）まだ（季子は来ない、という意味でいう）」

雅美「東洋史なんかとるからよ。絶対時間来ても終わらないんで有名なんだから（と持っていた本やノートやバッグをベンチに置き）ね、フケ落ちてない？ フケ（と肩を払う）」

則子「大丈夫（毎度のことなのでうるさい）」

雅美「昨夜洗ったのよう。もうフケが出るの。におわない？ かいでみて」

則子「いや（と押す）」

雅美「あー、なんかすっきりしない（と髪の毛を両手であおぐようにしながら、少し遠くを帰って行く友人に）あ（と手をあげ）明日お願いね、バイバイ（とニコニコ手を振る）」

則子「（腕時計を見、季子が来る筈の方を見る）」

雅美「あの子ゴールデンヘッズのライブテープ持ってるんだって。借りるの」

則子「ほんとかな？」

雅美「なにが？」

則子「季子」

雅美「え？」

則子「仮にも季子が、ヌードになろうなんて思う？」

雅美「そりゃ分んないわよ」

則子「一番そういうことと思わないタイプじゃない？」

雅美「見たことある？」

則子「なにを？」

雅美「身体よ、季子の」

則子「ない」

雅美「藝科行った時、お風呂で一緒だったの。結構こうなんだから（プロポーションのよさ）」

則子「だからって——」

雅美「（二方を見て大声で）おそーい」

季子、うなずいて、しかし走らずに、やや急ぎ足で、憂鬱にやってくる。

●新宿・東口の繁華街

●喫茶店

カメラマン山岸誠が、ふくらんだショルダーに三脚を持って入ってくる。出て行く三人ほどの人と入れかわる。「ありがとうございます」「いらっしやいませ」の声。

山岸「（ちょっとさがす目になる）」

季子「（席で立ち上る）」

山岸「あ（と笑顔になって近づいて行き）ごめんね、待たせて（と荷物を置く）」

季子「いえ。お忙しいのに（と一礼）」

則子「あの（と立ち上る）」

雅美「季子の友だちです（と立ち上る）」

則子「こんにちは（と一礼）」

山岸「（荷物から目をあげ）ああ、こんにちは（と品定めをするような目がありながらカラッと微笑して一礼）」

ウェイトレス「（山岸の水を持って来て）いらっしやいませ」

●同じ場所（時間経過）

山岸、則子を奥にして腰をかけ、向き合って季子、その横に雅美。

山岸「（一応話を聞き終えたところで、しょうがないなあ、というあたたかい笑いと共に、困ったなあ、というように両手で顔をこするようにして考える）」

季子「ほんと——前の日になってこんなこというの、ほんと悪いんですけど」

雅美「スタジオとか、そういうとこ、借りてあるんですしうか？」

則子「こっちが悪いんですから、出来るだけのことは、し

たいと思ってます」

山岸「両手はずし、季子に）惜しいじゃない（とヒタと見て、心からのようにいう）」

季子「——ええ」

山岸「これでも随分撮ってるんでね、あなた見た時、きつという写真撮れると思ったんだ」

季子「（うなずく）」

山岸「こんなこというのは、あれだけど、女性のボディが、完璧に綺麗なものは、ほんの短い間なんだよね。そういう時にプロのカメラマンに、撮らせておくっていうのは、絶対（あとあと）悪くないと思うんだけどな」

雅美「それは分るけど」

山岸「（見る）」

雅美「週刊誌にのるっていうのは——」

山岸「人が見なきや意味ないでしょ？ ヌード撮って、自分だけで見てるわけ？」

雅美「自分だけじゃないけど」

山岸「年とって子供に見せる？」

雅美「そうじゃないけど」

則子「やっぱり人前に、自分の写真が出るのに抵抗がある人もいると思うんです」

山岸「そりゃ格好悪けりゃ」

則子「格好よくても嫌だっという人いると思うの」

山岸「でもこの人はちがうじゃない。いいっていったもの（と季子を見る）」

季子「ええ——」

雅美「だから、気が変わったわけですよ（失礼にならないように努める）」

季子「すいません。ベナルティ、とってください」

山岸「金貰っても仕様がななんだよね」

季子「そうでしょうけど」

山岸「どっちか（と雅美と則子を見て）代ってよ」

雅美「えーッ」

則子「そんな——」

山岸「なにがそんなよ（と声は低いがすごんで）撮影の前日になって、代りも用意しないで、そんなこといえるのかよ？ 週刊誌に穴あけちまうんだぞ。こっちはフリーでやってんだ。一度信用なくしたら業界からしめ出されるんだ。道楽じゃねえんだぞ」

雅美「だって——」

則子「——」

山岸「どうにかしてくれよ」

季子「（青ざめ）いいわ、撮って」

則子「季子」

雅美「なにいつてるの」

季子「明日四時、此処ね（と逃げるようにドアの方へ）」

雅美「季子」

●季子のアパート・部屋（夜）

則子「（電話に出ていて）あ、お母さん、帰ってた？」

●篇子と則子のアパート・部屋

篇子「（仕事から帰ったばかり）どこ？（と不満の声）」

●季子のアパート・部屋

則子「ごめん。季子のアパート。夕飯帰れない」

●篇子と則子のアパート・部屋

篇子「なにいつてるの。今日は則子がつくるっていうから、なんにも買わないで帰って来たのよ」

●季子のアパート・部屋

則子「急用なの」

●篇子と則子のアパート・部屋

篇子「いつもそんな事いって」

●季子のアパート・部屋

則子「いつもじゃないじゃない」

●篇子と則子のアパート・部屋

篇子「少しはお母さんの身にもなってよ」

●季子のアパート・部屋

則子「分った（分ったじゃないでしょう、ひとが一日働いて帰って来ればしょっちゅう中いないんだから。夕飯ぐらい二人で食べたいわよ、といっている声小さく聞える。受話器を耳からはなして、雅美と季子の方を見る）」

季子と雅美、それぞれよりかかれるところに腰をおろして黙っている。

則子「（電話に目を戻し）もしもし、とにかく帰ったら話す。悪いけど切る（と切ってしまう）」

雅美「やだ、帰ったら話すの？」

則子「話さない、話っこないじゃない」

季子「——（考えている目で動かない）」

雅美「フフ、どうする？ ちょっとのむ」

季子「うん？」

雅美「のむ？」

季子「（苦笑し）ないもの」

雅美「なんにも？」

季子「うん——」

雅美「信じられない、お酒がなんにもないなんて」

則子「(季子を見ていて) 季子」

季子「(そらすように) お湯沸かすね(と立って行く)」

則子「いいって言うけど、絶対行くことないと思うよ」

雅美「そうよ。行くことないわよ」

季子「だからいいの」

則子「なにがいいの?」

雅美「どうするっていうの?」

季子「忘れて。なんとかするから」

雅美「なにいつてるの」

則子「私ね、ああいう撮影、どたんばで嫌だっていう人、わりといると思うの」

雅美「いるいる」

則子「そういうことちゃんと考えてると思うの」

雅美「そうよ。予備の用意してるわよ」

則子「業界からしめ出されるなんて、そんなこと、ありっ

こないと思うの」

雅美「オドカシよ、見えすいた」

則子「撮られることないわ」

雅美「そうよ。絶対責任感じることはないわよ」

季子「分った」

則子「行かない?」

雅美「行かないわね?」

季子「——(背を向けたまま)」

則子「どうなの?」

雅美「ここ、ちょっと、いらっしやい」

則子「季子」

季子「——(動かない)」

雅美「季子」

季子「あの人が——」

則子「うん?」

季子「口がうまくて、ついオッケーしちゃったっていったけど」

則子「うん」

雅美「ちがうの?」

季子「やつてもいいって気持、こっちにもあったのよ」

雅美「そりゃそうだろうけど」

季子「私、相当無理いって東京へ出て来たのよね。うち

じゃ、秋田の短大にしろっていうのはじめて我を張っ

て、どうしても東京の四年制に入りたいうって」

雅美「いらっしやいよ、こっちへ」

季子「(背を向けたまま動かず) 東京へ来たら、すっごく

世界が広がるだろうって思ってたわ。一生のうちに、そ

ういう時がなくなっちゃって——」

則子「うん(うながすようにうなずく)」

季子「だけど、臆病で私、全然どうってことなかったわ」

則子「同じよ」

雅美「なにする気だったの？（誰だって、そんなすごいことしてわけじゃないし、という気持）」

季子「だって二人は、ちゃんと恋人いるじゃない。私なんか、そういう人もなくて」

雅美「自分で断っちゃうからよ」

季子「だから——臆病なのよ。思い切って恋人決めることも出来ないの」

則子「臆病っていうのかなあ」

季子「もう一年足らずで卒業でしょ。全然どうってことなく卒業かな、これで就職出来なかつたら、秋田へ帰るしかないし、帰ってうちの手伝いして、きつとお見合いかなんかで、どっかの主婦になつて一生終るのかな」

雅美「嫌なら、どうにでもなるじゃない」

季子「私、成り行きを強引に変えるタイプじゃないのよ。きつと、そうなっちゃうのよ」

則子「だから？（うながす）」

季子「心のどっかで、なんかワッッと派手なことしてみたいって気持あったの。そこへ声かけられたでしょ。おどろくだろうなって思ってたわ。学校でも一番地味な方の私が、ドーンで週刊誌にヌードで出たら、一挙逆転っていうのかな、派手な人抜いちやうって気がしたわ。やってみたって、わりと思つたの」

雅美「へえ」

則子「分んくはないけど」

季子「そういうことで、人生思いがけなくひらけるかもしれないし」

雅美「でもさあ、家の人にも見られるし」

則子「そうよ。ヌード撮つとくつていうだけなら、私だっていいような気がするけど」

雅美「秋田帰りにくくなるんじゃない？」

季子「それもいいと思つたの。でも（ちょっと激して）そこまでやっていいかなとも思うし、正直いって、ものすごくいまだって迷ってるんだけど、こういうチャンス断つて、ただ溫和しく健全にキチンと生きてくだけではないかって——きつとあとで自分の臆病を後悔するんじゃないかって（とガスにかけた薬罐の手を握んでいて、興奮して床へたたきつける）」

雅美と則子、びっくりして「あ」「いやッ」と叫んで立ち上る。

●新宿・東口の雑踏（夕方）

雑踏の音あつてから、

ウェイトレスの声「泉田さま」

●喫茶店

ウェイトレス「お客さまに泉田さまいらっしゃいます」

か？」

季子「(隅に、雅美と則子といて) あ(と立ち上り) 私、
そうだけど——」

ウェイトレス「(傍の肥った十八九の大柄であまり表情の
ない男の子の方を見て) どうぞ(と季子の方へ手をさし
のべていなくなる)」

大柄の少年「(無表情で季子を見る)」

季子「(見て、目で会釈)」

大柄の少年「(反応せず、目を伏せて、季子の方へ)」

●ビジネスホテルの前

大柄の少年、玄関へ入って行く。

雅美の声「ね、ちょっとねえ」

大柄の少年、反応鈍く入ってしまう。

雅美の声「ちょっと」

大柄の少年「(戻って来る)」

季子を真中において雅美と則子、立っている。

雅美「ホテルじゃない」

大柄の少年「(うなずく)」

則子「スタジオとかそういうところじゃないの？」

大柄の少年「(うなずく)」

雅美「どうする？(と季子と則子へ)」

則子「(少年へ) 仕事場ってここなの？」

大柄の少年「(うなずく)」

雅美「ラブホテルじゃないけど」

則子「なんかやな氣しない？(不安)」

季子「でも(ともう決心しているので行く氣になってい
いう)」

雅美「うん？」

季子「なにかあれば、大声出せばいいんだし」

雅美「そうだけど」

則子「もし暴力団みたいのがいたらどうする？(と小声で
やはり氣がかりでいう)」

●エレヴェーター

止まっている。大柄の少年が入って来て、脇へ寄り、

五階のボタンを押す。

緊張した雅美、季子、則子が入って来て前を向く。

ドア、閉まる。

のぼって行くエレヴェーター。沈黙の四人。

●五階・廊下

エレヴェーターがあく。大柄な少年、のボタンを押
して動かない。

雅美「(その少年を見て) この階？」

大柄の少年「(うなずく)」

雅美「そういう風にいつてよ」

大柄の少年「(うなずく)」

雅美「じゃ、出る？(と則子を見る)」

則子「(うなずく)」

季子「(うなずく)」

三人、心を決めて、出る。振りかえる。

少年、鈍感に出て来る。三人、道をあける。少年、ド

サドサと歩いて一室の前で立ち止り、ふりかえる。

雅美「そこ？」

大柄の少年「(うなずく)」

雅美「行く？」

季子「(うなずく)」

三人、その方へ歩き出す。

* * *

●ホテル・廊下(夕方)

大柄な少年の前にあるドアがあき、

青年「(カメラの助手) おう(とチラと三人の方を見て消える)」

大柄の少年「(続いて中へ入り) 行って来ました(とボソ

ボソいうのが聞える)」

則子、季子、雅美、どうしたものかと半分あいたドア

を二三歩はなれて見ている。

山岸の声「どこ？ 外？(ガタンとなにかにぶつかる音などして顔を出し、明るく) あ、ごめんね、自分で行かないで。どうぞ(あ、ためらっているな、と思い、出て来て) どうぞ、どうぞ、ちょっと仕事中でね、見学しててよ、どうぞ、どうぞ」

●ホテルの一室(短く時間経過)

スリッパ姿の娘がベッドにいる。青年がライトをあて、

山岸がシャッターを押しながら、

山岸「オッケ、オッケ。そのままぐるっと寝返り打つようにこつちへね。そう(バシャ) すっごくいいよ(バシャ、バシャ) 話題になるんじゃないかな(バシャ) オッケ、じゃ、バンテイだけ脱ごうか。あー、暑いねえ(と三人の方を向き) ちょっと悪いけど見ててよねえ。なんでもないでしょ。フフ(とカメラを置く)」

雅美「あの、私たちが、今日もついて来たのはですね」

山岸「一人じゃ怖い(と季子を指していい) 分る分る(と勝手に笑って汗を拭き) しかし、こういうとこ見て貰えば分るけど、全然色っぽいとこなんか無いのよ。ムラムラする暇なんかありゃあしない」

青年「オッケです」

山岸「はい。じゃ、まずはお尻をこつちへ向けて正座して

貰おうかな。そう。そうして、両手を前へついでくれる？　そう。いいね、いいねえ、すっごくいいねえ。おう、なにしてんだ。もっと上から。ちゃんと（照明を）当てねえかよ（と青年にいう）」

●ホテルの一室（時間経過）

大柄の少年が、自動販売機から買って来たらしい罐ジュース七個をハアハアいいながら、出来るだけ早くというようにあけている。

山岸「（その一個をとって）はい。まずなにより加代子さん。（とベッドに裸で腰かけている娘へ愛想よく持つて行く）御苦労さまア。フフ、あとチョコッとかだからね（戻って来て）ほら、どんどんお渡ししないで、どうすんだよ。（と大柄の少年の頭をたたいて、自分で罐ジュースをとり）どうぞ、季子さんに、お友だち（と則子や雅美にも渡す）」

雅美「どうもあの（と仕方なく受けとり）あの、さっきいにかけたんですけど」

則子「（仕方なく受けとって）私たち、あの、条件があるんです」

季子「なんか、あの（ここまで来ていうのみのみともないけど、と弁解の気分です）」

山岸「いってみて（とニコニコ笑っている、ジュースをの

む）」

雅美「学校名をちゃんと出されるのは困るんです」

山岸「いいですよ、イニシアルで（とニコリ）」

則子「それから、顔がうつるのは困るんです。その二つを守って下さるなら、彼女、撮っていただくっていってます」

山岸「（笑顔が消えている）」

雅美「それは絶対条件です」

山岸「今時あんたね、顔かくしたヌードなんて、どこに売れるのよ？」

則子「そんなことは知りません。こっちの条件です」

雅美「条件が折合わなければ、断るしかありません」

山岸「おい、松田（と怖い目でいう）」

青年「はい」

則子「暴力ふるったら、さわぐわ」

山岸「（青年の方へ、苦笑し）今時、こんなの聞いたことあるかよ？」

青年「いえ——（山岸の顔色を見て合わせて苦笑する）」

山岸「（則子を見て）暴力なんて、ふるいませんよ」

則子「（そうですか（気をゆるめていない）」

山岸「そんなことしなかったってね、あんたらより綺麗なものが、ほら現にそこにもいらっしやるけど、いくらでも脱いでくれるんだよ」

雅美「だったら誘わないでよ」